
七色キャンディ

戸理 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七色キャンディ

【Nコード】

N8487S

【作者名】

戸理 葵

【あらすじ】

4歳の女の子にだって、色々事情はあります。そんな時、綺麗な飴玉をくれる人に出会いました。その飴玉は、人々の心から落ちた飴玉でした。

おや、お嬢ちゃん。どうしたんだい？ お散歩中？ そりゃいいね。

タンポポが好きなの。かわいいね。白いのをふーつとするのが好きなんだね？ だけど、水たまりに落ちちゃうのが可哀想？ 石の上に着ちちゃって死んじゃうのが可哀想？ 優しいんだね。

お兄ちゃんと喧嘩をしたの？ タンポポの取り合いで？ そりゃ困ったね。お兄ちゃんの方が多くのタンポポを取ったの？ 私が育てていたのに？ そうだったの。

お兄ちゃんは何でも私より多く取る？ ご飯もいっぱい？ それは心配だね。いつもお兄ちゃんの方が多くご飯を食べていたら、私はいつまでたってもお兄ちゃんより大きくなれない？ お兄ちゃんより大きくなりたいのかい。そんなに大きくなって、どうするんだい？

ケーキ屋さんになりたいの。それはそれは。お嬢ちゃんは食いしん坊なんだねえ。うん、その可愛いお腹を見ればわかるよ。

それにしても、さっきまで何をそんなに怒っていたの？ 可愛いお口が、一生懸命何かの文句を言っていたよ？

おやまあ、お友達の、あの子のお家の子供になりたいの？ それ

はまた、どうして？

え？ あっちのお家のおやつの方が美味しいから？ オモチャも沢山あつて楽しいから？ テレビも沢山、見れるから？

夜、寝る時はどうするの？ お母さん無して寝れるのかい？ あら、お友達さえいれば大丈夫なの。おやおや、強い子だねえ。

本当は知っているよ。お嬢ちゃん、お母さんに怒っているんだよね。

勝手にお家を引っ越しして、新しいお家ではちっとも遊んでくれないものだから。お兄ちゃんに任せっぱなしだものね。

お嬢ちゃんは、前のお家ではお友達がいなくて、寂しかった。毎日、お兄ちゃんの帰りを待っていた。一人で沢山、テレビを見ていたね。

やっと幼稚園に入る事が出来て、不安ながらもついに、お友達が出来たんだよね。お嬢ちゃんは皆に優しく、聞きわけの良い子だった。だからお嬢ちゃんの事が好きで、いつもついて回っていた女の子がいたね。あの坊やなんかは、お嬢ちゃんが泣いた時、ずっとあなたを膝の上に乗せて抱きしめてくれたものね。同じお年なのね。みんなお嬢ちゃんを好きで、お嬢ちゃんもみんなが好きだった。

なのにお母さんだったら、急に新しいお家に引越すのだから。

お嬢ちゃんが昔のお友達に会いたい事、必死に我慢しているのに、新しいお家でのお母さんは全然遊んでくれない。お兄ちゃんも、お母さんの見えない所で意地悪をする。

そりやお嬢ちゃん、怒っても仕方が無いよ。

新しく出来た素敵なお友達と、今度こそ離れたくないよね。思う存分遊びたいよね。そこのお家の子供になれば、寝るまで一緒に遊べるものね。朝起きても、一緒なものね。

来てご覧、お嬢ちゃん。ほら、飴をあげよう。

綺麗だろう？ いろんな色があって、いろんな味があるよ。食いしん坊なお嬢ちゃんには、いくつあげようかな？ 二つかな？

この飴はね、特別なんだ。だってね。

人の心が作った飴だからだよ。

優しい味、怖い味、楽しい味、悲しい味、色々あるよ。

でもね、怖い味や悲しい味は、人にあげた事がないから、この箱の下の方に沢山残ってる。注意おし。うっかりそれを取って口にしてしまったら、とつても嫌な思いをしてしまうよ。4歳のお嬢ちゃんなら、夜、眠れなくなってしまうよ。いくら、大好きなお友達と一緒にでも。

どうしてこんな飴があるかって？

それはね、人の心は、いい事も悪い事も、時間が立つと忘れてしまっただろ？ 実はその時、この箱の中に飴玉として落としていくからなんだよ。

ここだけ。内緒の話だけだね。

人の心は、いい事より、悪い事の方を長く沢山、覚えているものなんだ。

だからつまり、この箱の中には、優しい味や楽しい味、嬉しい味の方がいっぱい詰まっているって事なんだよ。安心した？ ふふ、脅かしてごめんね。

例えばこの飴。綺麗な深い緑色。これは10歳の女の子の飴。
この子はね、幼馴染の男の子が毎日苛められているのを、助けられないでいる。

ある日その男の子が、一人でこっそり泣いている所を見てしまったんだ。

男の子はどんなに苛められても、人前では絶対に泣かない。へらへら笑っている。だからまた、苛められる。

でもそれが、彼のプライドだって気付いた女の子は、隠れて泣いている彼を見た時、黙ってその場を去ったんだ。

今も彼女は、男の子を助けられないでいる。自分が苛められるのが怖いからね。

心の中では悔しくて、悲しくてしょうがない。助けられない自分が情けなくって、しょうがない。

だけど、その男の子が、彼女の中ではヒーローなんだ。誰よりも強くて、カッコいいヒーロー。

自分のプライドを守り、人前では決して涙も弱さも見せない、ヒーロー。

その憧れを胸に膨らませた時、その女の子は、自分の悔しさと悲しさを手放す事が出来たんだ。それが、この飴玉。

あれ？ 4歳のお嬢ちゃんには、難しすぎたかな？

じゃあ、この飴玉はどう？　これはね、7歳の男の子の飴玉。透明な水色。

この男の子はね。自分の事しか考えない子なんだよ。沢山のオモチャが欲しい。美味しいものは全部、ママから取っちゃう。自分の話は、いつも誰よりも聞いて欲しい。思い通りにならないと、自分は世界一可哀想だと感じてしまう。

そんな坊やがある日、季節外れのカマキリを見た。秋も深まり、朝晩は霜が降りるぐらい寒い時期だ。坊やのお家の軒下にとまっていた。

カマキリが怖い！　と騒ぐ坊やに、ママは言った。外はもう寒いから、少しでも温かく感じる所にいるのでしよう。そっとしてあげてご覧？　坊やだって、お外から帰ったらコタツに入るでしょう？　カマキリさんは、それが出来ないの。

男の子はじっと考えた。コタツに入れないカマキリは確かに可哀想だ。家の軒下ぐらい、許してあげよう。

次の日、カマキリはまだ、坊やの家の壁にいた。少し移動して、陽のあたる場所で日光浴をしているようだった。男の子はとても納得した。

次の日、カマキリはまだいた。少し移動して、男の子の自転車の側にいた。日光浴が気持ちよさそうだった。

そして次の日。男の子の自転車の上で、カマキリは動かなくなっていた。その日の朝は、とびきり寒いものだった。

男の子はね。初めて、自分以外の何かで、涙を流したんだよ。寒いのにじっと耐え、文句も言わずに死んでしまったカマキリが、可哀想で可哀想で仕方無かったんだ。

眼を真っ赤にして、誰にも聞こえない様に、そっと呟いた。「カマキリさん、僕のうちに来てくれて、ありがとう」

そして初めて、カマキリを素手でつかむと、一人で庭に埋めたんだ。

その時に出来た飴玉が、これ。

おや、お嬢ちゃん。可哀想って？ 男の子とカマキリが？ 優しいんだねえ。

でもカマキリはともかく、男の子は大丈夫だよ。だってこの飴玉、その日から3日後にはもう、この箱の中に入っていたのだから。

お、こんな飴もあるよ。どうだい？ これはね、大人の女の人の飴。白くて透明だね。

この人はね。不安だらけなんだ。だって先が読めないのに、小さな子供を二人も抱えているんだよ。

頼りにしていた家庭に不幸が訪れ、悲しくて不安でしょうがないんだ。

だけどそれを決して、小さな子供達には見せない。何故なら、自分がいつも自信を持ち、笑っていれば、子供達は安心するに違いないと信じているからさ。

だから、そういうフリをし続ける、と決めた。お腹の底に力を入れ、フリがいつか本物になる事を願って、決心したんだ。この飴は、その時出来たものだよ。

じゃあお嬢ちゃんには、この水色の飴と、この白い飴をあげようかね。

大事に持ってお帰り。
そして大事にお食べ。

だってそれは、

あなたのお母さんとお兄ちゃんの、飴だから。

それを食べたなら、お母さんの愛情と、お兄ちゃんの優しさが、お嬢ちゃんのお腹に染みるよ。

染みるって、ああ、痛くない痛くない。擦りキズの消毒とは全然違うよ、安心しなさい。

お腹がほっこり、温かくなるってことさ。

そしてもっと、二人と仲良く出来るって事だよ。

そしてほら、この飴玉もあげよう。お家に帰って、お母さんとお兄ちゃんにおあげ。

この青いのは、出来たてはやはや。お嬢ちゃんが「このお友達のお家の子になるっ」って騒いだ時に出来た飴だよ。お母さんにおげなさい。

このピンクは、お嬢ちゃんがお菓子をお兄ちゃんにあげた時に、出来た飴。あなたはいつも、おいしいものを食べる時、必ず誰かに分けてあげるよね。「これ、おいしいよ、食べてご覧」

これが出来るか出来ないかは、4歳も40歳も関係ないんだよ。お兄ちゃんにあげてご覧。

お兄ちゃんが、転んでどんなに痛くても泣かなかつた時に出来た
飴と、年上だからってお嬢ちゃんより5倍もお母さんに怒られても
我慢している時に出来た飴は、
今度来た時にでも、お嬢ちゃんにあげるよ。お嬢ちゃんは優しい
けど、すぐ泣くからね。

ほら、お帰り。

みんなでこの飴を食べて、家族がもっと、仲良くなるんだよ。

この緑色の飴をどうするかって？

そりゃ、決まってるだろ？ あの男の子にあげるんだよ。

だって私がこっそり、あの女の子の憧れも混ぜたからね。大丈夫、
ちよっと貰った所で、彼女の憧れは消えやしない。膨らむ一方だよ。

その憧れが男の子にも伝わって、あの子は本物のヒーローになれる
だろうから。

(後書き)

今までとは毛色の違った物を無性に書きたくなって、約2時間で仕上げました。SMスイッチ以来の高速執筆です(笑)

読みづらいかもしれません。申し訳ありません。お暇つぶしになれば、嬉しいです。

でも、童話って、誰が読んでくれるのかなあ・・・？ (自分で書いておいて)

そもそもこれって、童話なのかなあ・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8487s/>

七色キャンディ

2011年5月1日14時52分発行